は、「うるはし」的美に圧倒された内面的美で所謂葵上の精神美と考える。

② 六條御息所について

御息所の容貌容姿に於ける形容詞的美がはつきり摑めない事、通常の性格的特徴は、「恥かし、深し」で慎しさ、奥ゆかしさが一系列をなしている。性格を現す「深し」容姿を現す「心憎し」は趣味を対象とした性格に関連性を有しており、趣味を対象とした性格に於て理想的な美に到達している。又物怪としての「あさまし、むくつけし、ゆゆし」的性格は源氏の愛情を一層遠いものにしている。

③ 紫上について

特徴的美は、「美し、らうたし、をかし」である。「めでたし、ありがたし」は源氏の理想教育がもたらした、総合美で「めでたし」は主に容姿美に、「ありがたし」は性格描写に著しい傾向を示している。紫上の嫉妬は、源氏に煩わしいものを与え、源氏の愛は絶体的なものと考える紫上は、ある面では独占力の強い女性であると考えられるので、私は理想的な女性として定義づけない。

④ 玉鬘について

特徴美は、「をかし、美し、らうたし」である。「なつかし、今めかし、清し」は玉鬘の独得的なものとして、個性美として定義づける。これらは、恵まれぬ境遇にある玉鬘を人間的に美しいものにし、六條院に於ける華やかな生活に、順応しうるものを与えたのである。こうした玉鬘の美的特徴は自分自身を自省し、把握した上で自分の置かれた境遇に順応させ、調和させた結果であると考える。

（三十三年度卒業）

# 伊勢物語研究

## ― 三代集との関係に於いて ―

筒井久子

伊勢物語は、常に和歌がその小説的場面を構成する重要な材料となつているが、中心になる和歌を何からとつたかとということや、その詞書が伊勢物語の文章とどのような関係にあるかということを、三代集との出典関係に於いて考察してみたいと思う。

△ 古今和歌集との関係に於いて

古今集は勅撰集であり、それの詞書は簡潔であるのに、ただ業平の歌に限つて全体からみると、統一を破つて長い詞書をもつており、又、その詞書は伊勢物語の文章と多く違つていない点から、伊勢物語、或はその粉本ともいうべき業平家集と密接な関係にあるに相違ないという推定は、

性美として定義づける。これらは、惠まれぬ境遇にある玉鬘を人間的に美しいものにし、六條院に於ける華やかな生

従来多くの人によつて試みられ、又、詞書によつて、伊勢物語と古今集との先後の問題についても種々されているが、それを要約すると、

一、古今集の詞書を基として伊勢物語が書かれたとするもの。

二、伊勢物語を基として古今集の詞書が出来たとするもの。

三、伊勢物語、古今集共に伊勢物語の粉本とも言うべき業平家集に素材を仰いで書かれたとするもの。

大体以上の三つに分かれる。それでは伊勢物語の文章と古今集との関係がどのようになつているか、又、その結果どういうことになるか、定家本系統の本によつて両者を比較すると、天福本二百九首中、古今集に見える歌六十二首を数えることが出来るが、それらを次の三つの場合に大別して考証をすゝめてみたいと思う。

㈠ 古今集の詞書に簡単であつて、伊勢物語の文章が詳細な場合。

イ、伊勢物語の文章に比較して、古今集の詞書が極めて簡単な場合。

これには十二首の歌が属する。

ロ、古今集に於いて、「題しらず」「みちのくうた」「おきのゐ、みやこしま」等となつている場合。

これには二十四首の歌が属する。

違つていない点から、伊勢物語、或はその粉本ともいつき業平家集と密接な関係にあるに相違ないという推定は、

㈡ 古今集の詞書に詳細であつて、伊勢物語の文章が簡単な場合。

これに属するのは一首だけである。

㈢ 古今集の詞書と伊勢物語の文章と、共に繁簡の大体一致する場合。

イ、古今集の詞書と伊勢物語の文章と大体一致する場合。

これには十八首の歌が属する。

ロ、その内容にいくらか差異のある場合。

これには七首の歌が属する。

以上によつて、前掲㈠の場合に一首、㈢の場合に二十五首、そのうち内容に差異の認められる歌の七首存在するということは、現存の業平家集の形態をみると、伊勢物語の粉本とか原形とか認められないが、現存の業平集と違つたもつと長文の詞書をもつた伊勢物語の粉本とも云うべき業平家集の存在を想像することは、そう不自然とも思われず、古今集、伊勢物語共にそれから採録したと解釈していいと思われる。又、㈠の場合に三十六首も存在するということは、古今集が伊勢物語からこれ等の歌を採録したとは認める事が出来ないことを示すと共に、古今集では「題しらず」や短い詞書しかない歌が、伊勢物語の方では長い文章になつているのは、明らかに古今集から取材し、これを物語化したと考えられる。

大体以上の考察によつて、古今集は単なる蒐集ではなく撰集であり、その上勅撰集であるから、その体裁の統一という点からすると、選んだ歌の詞書に対しても或る程度の省略や加筆をしたとみるのが穏当であろう。従つて業平の歌に限つて詞書の長いのは、古今集の序で六歌仙の才一の歌人として挙げた業平に対する尊敬のためとは云え、又、即興と贈答の歌の多いところからそれを必要としたとは云え、やはり伊勢物語の粉本とも云うべき業平家集の存在をみとめ、それよりはいくらか簡潔になつていることを認めていゝと思われる。一方、伊勢物語に於いては、単なる業平集の集成ということのみに重点を置くのではなく、一つの筋の展開を主眼とする歌物語として編纂されているので、伊勢物語としての性質及び形態上修飾の施されるのは当然であろう。従つてこの場合には詞書を簡単にすることを必要とする場合は少く、むしろ加筆してより詳細にする場合の多いことを認めていいと思われる。

要するに、先行伊勢物語とも云うべき業平家集の詞書は、現存伊勢物語に於いて極端な変化をしているのではなく、大体古今集に於いて簡易化しているのを対蹠的に複雑化しているということが出来よう。結論は、池田亀鑑博士が、

「伊勢物語の粉本とも云うべき業平家集は、古今集の重要な材料の一となると共に、又、伊勢物語の骨子を形成するものであつた。而して、古今集は一方業平家集に拠ると同時に、他方に於て伊勢物語の成立に対し、幾多の素材を提供したものであると考えられるのである。換言すれば、伊勢物語を構成する歌の中に、直接業平家集より来るものと、古今集より取入れられたものとを区別し、粉本伊勢物語、即ち、業平家集と古今集と伊勢物語とを三角関係に於て認めようとするのである。」

と「伊勢物語に就きての研究、研究篇六〇三頁―六〇四頁」に於いて述べて居られるのと同じくする。

△後撰和歌集との関係に於いて

次に伊勢物語と後撰集との関係であるが、これは難しい問題である。何故なら、古今集の場合に比べて著しく明確を欠くからである。定家本系統の本を例にとつて比較してみると、伊勢物語にも出、同時に後撰集にも出ている歌は十一首ある。これらは後撰集から伊勢物語の編者が選択したと見るべきか、それとも反対に後撰集の編者が、これを伊勢物語の中から選択したと見るべきか、先づ十一首の和歌が両者に於いてどのように現われているかを比較し、相互の関係について考察してみたい。

後撰集の詞書によつて要約すると、次の二つの場合に大別出来る。

㈠ 後撰集の詞書が大体伊勢物語の文章に似ている場合。

これには四首の歌が属する。

「伊勢物語の粉本とも云うべき業平家集は、古今集の重要な材料の一となると共に、又、伊勢物語の骨子を形成

(二) 後撰集の詞書が「題しらず」か、或はあるにしても極めて簡単な場合。

これには七首の歌が属する。

の以上であるが、古今集の場合は、その詞書が伊勢物語の文章と相類似していて、密接な関係にあることを予想出来る十分なものがあつたが、後撰集の場合には、古今集の場合ほどの密接な関係が認められない。従つて、古今集に於いて、「題しらず」や詞書の簡単な歌の多くが伊勢物語の方では長い文章になつているのは、古今集から取材したものとして、これを物語化したと考えることが出来たので、こゝに於いても古今集の場合の説明を転用すると便利のようであるが、実際に於いては、ほんの一例をみてみても、八十二段の最後に、

親王に代り奉りて紀有常

おしなべて峯も平らになりななむ
山の端なくば月も入らじを

とあるのに対して、後撰集の雑歌三には

月夜にかれこれして　上野岑雄

おしなべて峯も平になりななむ
山の端なくば月も入らじを

とあつて、作者、詞書共に大変な相違であつて、古今集の場合と後撰集の場合とでは差異があり、甚だ困難である。

又、古今集に於いては業平の歌は三十首とも全部所収さ

(一) 後撰集の詞書が大体伊勢物語の文章に似ている場合

これには四首の歌が属する。

れていたが、後撰集に於いては必ずしもそうではない。

巻才五　秋歌上

女のもとよりふみ月ばかりにいひおこせて待りける
読人しらず

223 秋萩をいろどる風の吹きぬれば人のこころもうたがはれりかへし　在原業平朝臣

224 あき萩をいろどる風はふきぬとも心はかれじ草葉ならねば

巻才十　恋歌二

人のもとにしばしばまかりけれどあひ難く待りければ物にかきつけ待りける　在原業平朝臣

629 暮れぬとてねて行くべくもあらなくに辿る辿るも帰る優れり

巻才十三　恋歌五

題しらず　業平朝臣

892 伊勢の海に遊ぶ蜑ともなりにしが波かき分けてみるめ潜かむ　伊勢

かへし

893 おぼろけの蜑はや潜く伊勢の海の波高き浦におふるみるめを（イは）

巻才十三　恋歌五

久しういひ渡り待りけるにつれなくのみ待りければ　業平朝臣

968 たのめつつ逢はで年ふるいつはりにうりぬ心を人は知らなむ　　伊勢

969 夏蟲のしるしる惑ふおほひをば懲りぬ悲しとたれか見かへしざらむ

巻才十六　雑歌二

思ふ心ありて前太政大臣によせて待りける　　在原業平朝臣

1126 頼まれぬ憂世の中をなげきつつ日蔭におふる身をいかにせむ

巻才十七　雑歌三

大井なる所にて人々酒たうべけるついでに　　業平朝臣

2232 大井川うかべる船のかがり火にをぐらの山も名のみなりけり

等、従来の註釈書の所説に従つて、後撰集に業平の歌としてあげてある「伊勢の海に」「たのめつつ」の二首を批把左大臣仲平の歌と認めるとしても、なお四首の歌が後撰集には業平の歌とされていながら、伊勢物語天福本には見えていない。元来、古今集に漏れた歌を選集することに重点の一つを置いた後撰集の編纂態度から考えてみると、この事実は古今集と伊勢物語の関係と、後撰集と伊勢物語との関係に同一視されない異つた問題が存在していることを意味していると思われる。若し伊勢物語が後撰集によつたものとすると、後撰集の「読人しらず」の歌を拾録しておりながら、前掲のように後撰集には業平の作とある歌が、伊勢物語には採録されていないという点に於いて問題があるし、反対に後撰集が伊勢物語によつたものとすると、単に「題しらず」とあるものは、古今集の場合と同じ説明が出来るにしても、古今集ほど詞書が密接な関係にあるものがないことや、詞書の差異のあるもの等のあること、伊勢物語に於いては作者名のない「をしなべて」の歌が上野岑雄、「こひしとは」の歌が在原元方の作とされていること、伊勢物語が後撰集の読人しらずの歌まで収録して居りながら、「秋萩を」以下六首（四首）の歌が収録されていないことなどの点に問題があるが、諸本比較の結果定家本系統の本に於いては、後撰集に業平作としてみえている「難波津を」「いとどしく」の歌は存在しているが、為家本には存在しないことを考えて、後撰集成立前に才一次伊勢物語ともいうべきものが存在し、後撰集の成立と前後して、才二次伊勢物語とも云うべきものが成立したと考えたならば、これ等の問題点もある程度まで解消出来るのではなかろうかと思う。

△拾遺和歌集との関係に於いて

次に拾遺集との関係であるが、伊勢物語にも出、拾遺集にも出ている歌は六首ある。そのうち、

関係に同一視されない異つた問題が存在していることを意

天福本才七十一段
145 ちはやぶる神のいがきもこえぬべし大宮人のみまくほしさに
万葉集巻十一
2463千葉破神之伊垣毛可越今者吾名之惜無
拾遺集巻十四
924 千葉破 神のい垣も越えぬ べし今は わが身の惜けくも なし
天福本才七十四段
149 いはねふみかさなる山にあらねどもあはぬ日おほくこひわたる哉
万葉集巻十一
2422石根蹈重成山雖不有不相日数恋度鴨
拾遺集巻十五
969 岩ねふみかさなる山はなけれどもあはぬ日かずを恋や渡らむ
天福本才百十六段
212 浪まよりみゆるこしまのはまひさしひさしくなりぬきみにあひみて
万葉集巻十一
2753浪間従所見小島之浜久木久成奴君爾不相四手
拾遺集巻十四
856 浪間よりみゆる小島の浜楸木久しくなりぬきみにあはずて

にも出ている歌は六首ある。そのうち、

のように、三首は万葉集と拾遺集との歌詞がほゞ同一であり、伊勢物語のそれは相違する。この事実によつて三者の相互関係に二つの場合が想像される。その一は、伊勢物語が万葉集からとり、拾遺集も万葉集からとり、伊勢物語と拾遺集の間には、何の相関関係も見出されない場合、その二は、伊勢物語が拾遺集を通して万葉集に関係する場合である。これらの三首が直接万葉集から拾遺集にとられ、伊勢物語との間に間接的関係しか認められないことは、既に池田亀鑑博士がその著書伊勢物語に就きての研究に於いて論議されている。従つて、伊勢物語が拾遺集から採録したか、拾遺集が伊勢物語から採録したか、或は両者共に他から採録したかという問題の解決は残りの三首にかかつてくる。そのうち「忘るなよ」の歌は、従来しばしば問題視され、人の注意を喚起しているものであるが、池田亀鑑博士が諸伝本の研究から、この歌が小式部内侍本には巻末にあることから、増補したものと考えておられるのに従い、以上四首の歌を除外すると、二者の関係を明らかにする最も重要な資料は、残りの二首の歌に制限される。そのうちの「近江なる」の歌が諸本比較の結果、真名本には存在しないから、結局は一首だけで二者の先後関係をはつきり導くには甚だ困難である。若し伊勢物語がこの一首を拾遺集から採録したとすると、

をがはのはし　　在原業平朝臣

381 筑紫よりここ迄くれど苞もなしたちのをかはのはしのみぞある

女に物いひはじめてさはること待りてえまからでいひつかはし待りける　　在原業平朝臣

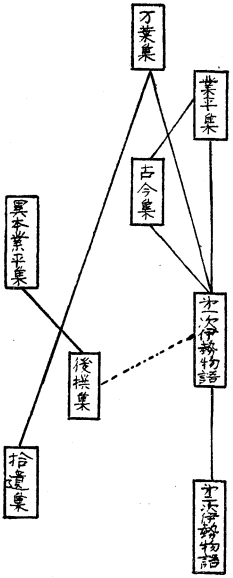
728 かゝらでもありにしものを白雪の一日もふればまさる我が恋

の二首が採録されていない。（もつとも「筑紫より」の歌は、伊勢物語の異本である神宮文庫本や小式部内侍本には存在すると云われる。）この事実によつて、伊勢物語と拾遺集との間には直接の関係は認められず、伊勢物語が拾遺集に素材を仰いだという見方を否定して、むしろ両者共他の材料から拾録したと見た方が妥当であろう。

## 結　び

以上、伊勢物語と三代集との詞書の比較から、その前後関係を考察したのであるが、成立の問題に関しては従来多くの人によつて論議され、その研究論文も多いが、何れも定論とならず、幾つかの説が並存している。

本論に於いて得た結論に従えば、古今集勅撰によつて私家集の流行の因となり、業平崇拝の機運によつて集大成と統一へと動いて、歌物語的要素をもつた才一次伊勢物語を生み出すに至つたものと思われる。即ち、伊勢物語の源流を歌集である業平集に求め、業平集を中心として先ず原形的歌物語の才一次伊勢物語が編纂され、更に後人の手によつて敷衍され、より完備した物語的形式に改編されたものが、現存伊勢物語であると推測される。というのは、伊勢物語諸本の比較をしてみて、諸本によつて出入りのある段に、古今集の歌や後撰集の歌があることなどを、考えのうらづけとする。私はこゝに、伊勢物語と三代集との関係を次の様な関係に於いて認めようとするものである。即ち、古本業平集と古今集、伊勢物語の三角関係を認め、そしてこの才一次伊勢物語から才二次伊勢物語への成長の時期と前後して、後撰集、伊勢物語と直接関係を持ちながら、他方に於いて異本業平集というべきものも参考としつつ成立し、拾遺集に於いては本論に於いて考察したように、伊勢物語とは間接的関係しか認められないと思う。




（三十三年度卒業）